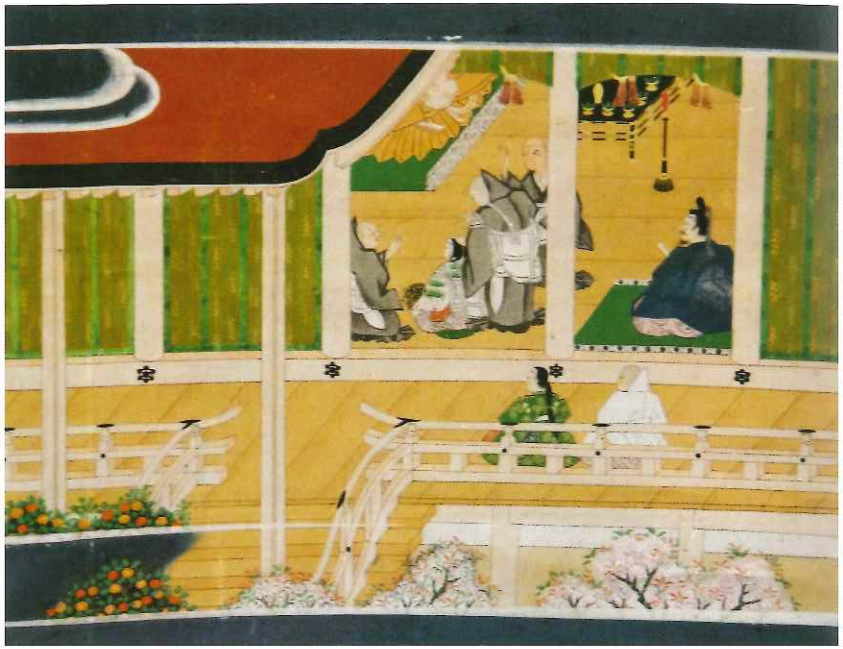
岐阜の教如上人

郡上市明宝西気良・教如上人住居跡

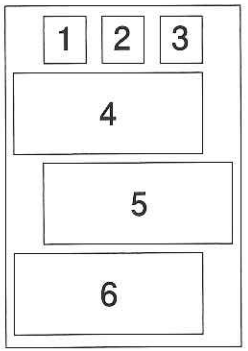
揖斐川町春日美束

真宗大谷派 岐阜教区出版委員会



教如上人下付の御絵伝（部分）　（安養寺蔵）
狩野山楽（安土桃山時代の画家。京狩野の祖）・画

⇨P19



表紙写真

1. 五日講収蔵教如上人寿像（部分）
2. 光顕寺収蔵教如上人寿像（部分）
3. 西方寺収蔵教如上人寿像（部分）
4. 郡上市明宝西気良
5. 羽島市側から長良川を挟んで安八町を望む
6. 揖斐川町春日美束

教如上人寿像　（光顕寺蔵）

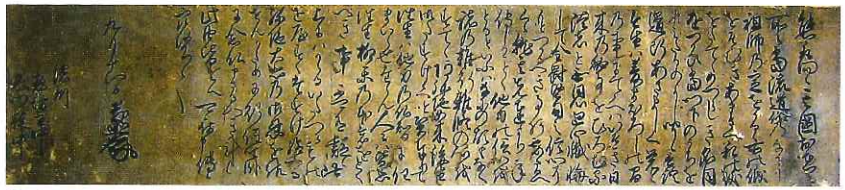
⇨P26

教如上人寿像　（西方寺蔵）

⇨P25

教如上人寿像　（五日講蔵）

⇨P32



教如上人書状　（發心寺蔵）

春日村で助けてもらったお礼と、さらに信仰を深め念仏を勧めることなどが書かれている。⇨P32

教如上人下付の本尊（大悲尊像）　（報徳会蔵）

⇨P30

散らさじと森部の里に埋めばや
かげはむかしのままの江の月　教如

須弥壇引戸（教如上人辞世歌）　（光顕寺蔵）

⇨P26

【大意】「私は、今ここ、森部の里にわが身を埋めねばならず、無念だ。長良川に映る月の影は、昔と変わらないが、人は死にたくなくとも、死なねばならず、はかないものである。」

目次

教如上人とは？……11
教如上人プロフィール……12
教如上人御旧跡……14
郡上編……14
教如上人住居跡（郡上市明宝）……15
安養寺（郡上市八幡町）……18
その後の本願寺と教如上人……21
羽島・安八編……22
西方寺（羽島市足近町）……23
光顕寺（安八郡安八町）……26
土手組……28
報徳会……30
揖斐・春日編……32
五日講・顕教踊り（揖斐郡揖斐川町春日）……32
鉈ヶ岩（揖斐郡揖斐川町春日）……36
昔話「教如上人自画像と五日講」……38
本願寺東西分立と美濃門徒の分属……40
おわりに……42

鉈ヶ岩屋

揖斐川町春日美束

⇨P36

教如上人とは?

教如上人は東本願寺の創立者であり、親鸞聖人から数えると十二代目にあたる方です。上人の生涯は、戦国乱世に生を受け、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という天下人とわたりあう、まさに波乱万丈の56年でありました。このような時代背景も関係してか、その人柄については戦国武将的なイメージが先行することもありますが、これも偏に、聖人が残された本願念仏の教えを絶やすことなく伝え、聖人の御真影を安置する本廟を護持相続することに尽くされたことは、異論を差し挟まないことでしょう。

2013年、上人の四百回忌にあたり、本山・東本願寺をはじめ、各地において法要が勤められました。そこで教如上人の足跡を訪ね歩いてみようと思い立ったのですが、その中でも、この岐阜の地にゆかりのある御旧跡を歩いて、上人の功績に思いを馳せてみることにしました。

第12代・教如上人プロフィール（1558～1614）

1558年第十一代・顕如上人の長男として誕生。
10年間にもおよぶ「石山合戦」では、本願寺を死守しようとする僧侶・門徒らの思いに共感し、織田信長と徹底抗戦する。顕如上人の死後本願寺住職となるが、豊臣秀吉の命令により弟の准如にその職を譲ることとなる。隠退してからは『正信偈』『和讃』『御文』を開版するなど、上人を支持する門徒に対し独自の教化を進めた。徳川家康から京都東六条の土地の寄進を受け東本願寺を創立。以後、教化拠点としての御坊（別院）を多く建立するなど、現在の大谷派宗門の礎となる体制を確立。
1614年に享年57歳で示寂。

大坂本願寺合戦（石山合戦）は、織田信長が難題を押し付けそれに抗戦する様相で始まり、1570（元亀元）年から1580（天正8）年までの11年間続いた、本願寺門徒衆と信長との対決をいいます。天正8年、本願寺第十一世顕如は、長きにわたり信長の執拗な攻撃に耐え続けていましたが、籠城も限界と判断し、信長の示した講和条件を全面的に認め和平に応じました。しかし、時を同じくして繰り広げられた、長島の一向一揆での信長の冷酷さと信長の言葉への不信を抱いていた長男教如は、父顕如の意向に反し、徹底抗戦を決断します。

教如は父顕如から義絶されながらも籠城し続けました。この際、教如は郡上安養寺に書状を送り粉骨の尽力を要請しています。天正8年4月9日、顕如は本願寺の寺基を紀州の鷺森に移します。しかし、籠城も厳しい状態となり、同8年8月2日、教如はやむなく大坂を退去し、紀州雑賀に赴きしばらく形勢を観望していました。

その後、教如は甲斐の武田勝頼を頼りに身を寄せようと試みますが、実際は、大和（奈良県）から越前（福井県）大野、そして九頭竜川上流より美濃（岐阜県）の白鳥、郡上八幡の方向に向かったようであります。近年の研究では美濃の郡上八幡を中心とし、北陸越中（富山県）城端方面や尾張・三河（愛知県）の北部、山岳地帯なども潜伏地として考えられています。これらの地域には教如をかくまったという伝承が残っていることや、信長軍との徹底抗戦を支援する門徒衆がいたこと、さらには約2年間の流浪期に教如が下付した歴代絵像・絵伝等が現存することが、近年の調査で判明しています。

そこには顕如でなく、教如を慕い支える支援者・門徒衆がいたということであります。しかも下付されたものの中には、「本願寺釈教如」「大谷本願寺釈教如」と署名証判されているものも多く、義絶・流浪の身でありながら門主の職務を教如が行っていたことを意味し、「教如教団」の萌芽期であったとも考えられます。

教如上人御旧跡

郡上編

石山合戦は11年もの間続きましたが、本願寺は万策尽きて和議を結ぶことになります。信長が示した七ヶ条の講和条件には、大坂の本願寺を手放すことも含まれていましたが、父の顕如上人はやむなく受諾し退去しました。対して、教如上人は和議をかわしたものの、本願寺を死守すべく自らの命を懸けて戦う門徒衆の存在と、「信長は勅命による和議であっても平然と裏切る人物」という、大坂退去を反対する声に後押しされ、籠城し徹底抗戦することを決意します。もちろん、教如上人一人で籠城を強行したわけではなく、郡上安養寺に代表されるように、これを支持する末寺や門徒衆、本願寺家臣団が多数存在していました。しかし、蓮如上人以来の大坂坊舎・大坂本願寺を信長に手渡したくないという思いもむなしく、1580年8月に教如上人は大坂を退去します。そしてここから、信長の追っ手から逃れるため、各地を転々とする約2年間の教如上人の「流浪期」が始まるのです。教如上人23歳でした。

そこで今回、郡上市明宝に残る「住居跡」と、郡上市八幡町の安養寺さんにある資料館を訪ねてみました。

2月の郡上はとても寒く、まだ雪が積もっていました。郡上市明宝に残る「教如上人住居跡」は山の中にあり、道に迷いながらもようやくたどり着くことができました。「住居跡」といっても現在ではただ石碑があるのみで、あたりは見渡すかぎり山、山、山で何もないところで、このような山中に隠れ住まなければならなかった上人の境遇が一層うかがわれました。

教如上人住居跡（郡上市明宝西気良）

郡上市明宝気良では、里人が古くからこの地を「教如屋敷」と伝えて保存してきました。大坂石山合戦後、本願寺教如上人が、八代八右衛門の案内により、織田信長からの追っ手を避け、一時ここに隠れ住んだといわれています。

八代八右衛門の子孫、八代實太郎氏によって1918（大正7）年11月に建てられた記念碑